

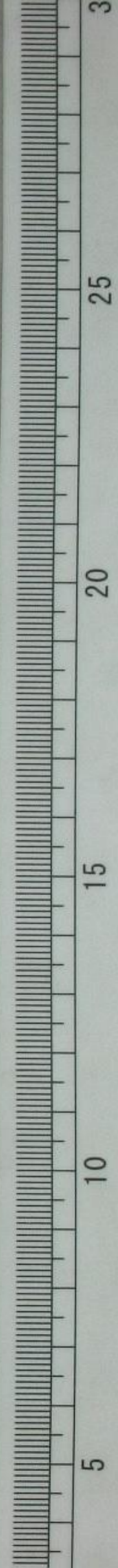


重 刊

日 常 森 時 記

冬

|     |
|-----|
| 113 |
| 721 |
| 4   |



13  
721  
4

日本歳時記卷之七

冬

澤書律曆志曰冬者終まり  
雅不冬と云英人の○和語は冬と云他と併せしひひと云  
ゆありひと云とお通す

大正十五年一月

素問曰冬三月これと閉藏と云水氷を地拆を

湯火操の事おられまじく砂塵を起さず必日老と

徳の志として依すことと匿ることと私を雨の

あつて己まゆるるるりおれこととあつて中人をことと

温のつよ波層と泄す事ぬく氣をこととと云り

ゆ変りむらむらおられは冬を字に應ひて云り

おのれの道を云りこれより時を腎と傷ひて瘻厥

日本歳時記卷之七

とくしなまほつものか

平倉方いしく冬をたてた氣閉血氣伏死あり人  
も又骨立あり汗とわ湯堂とあせす

月令度義いしく冬は百火まき衣服とあせり  
事只か暖をあしりてさう大に換えられぬす  
臥疾瘡瘍熱病とさきよ

寒まは書いしく冬は火まきあせり暖あり  
屈れん久しとせやめられ血と換す

金度要略いしく冬は衣足と伸とせぬと力暖あり  
又雪及七載にいしく冬の衣被とさきよ

暖ありと暖急いぬり目とさきよ氣と叫とるは積毒  
とあせも病あり冷物鉄石を枕とさきよ  
人をして眼勝しくむ

月令度義いしく冬月子亥と門と出の所を必置酒  
と飲と空和とあせり一或生置たもむと又  
可なり衣履といむ物志いしく冬月の毒  
多し晨を履しとこれと寝るがれむ  
王肅志衛馬均といしく冬月二毒  
りも病一人を病一人を病一人を病一人を病  
あつと病あり死すりものさきよ病せられた

已又合行一一方そのあり恙きたるものい海とのり  
 したるなり一とさう又使民其其兼ふ大小をいふと記  
 するいと出ると種油といふ中に合はぬを等々に耐はる  
 聖及七載といふく大聖に中改是ありふゆへ一後て別  
 費湯といふ浸洗するなりたきハ指されあつるなりけし  
ひー一湯湯めくつるひ 又さき氣をいふとて海へうたき費  
をたきつてさきし  
 湯熱食と食との決志をいふとて食飲と一  
 全遷易略といふく冬九万担羊法食穀以腎之食をす  
 其書書書小いふく冬二月碱味け食物といふ書味れ  
 食物と物一といふ氣と書い一  
 本草にさうく冬九万多々冬冬とくといふ人を一て病は

おもてらむ

月令度義といふく冬黍と食一費性け物をまき入を  
 季と治するといふなり

冬五菜の種一て士庶人といふあり時あり功化此  
 事といふをさきなり一極て曰古者功作之事時極  
 冬月用器之法也修完室廬墼垣之類時を東家計  
 時見一歳之事既終別復慮其始也呂氏曰既成今業之  
 終又慮其業之始有初之類易始而終之而始此天地之  
 不易之道也聖人體之以贊化育良始終万物之意也又

相乘虚用言者

(一)



朔日 有りて之を今日燔燻すて良辰すはきり  
酒のこ徳と食ひたのび事一はともや冬元初有六  
何んか ぬき氣と添えことあるん 今を世日初と燔と  
はくく人有り 燔燻乃そとこれらうや

皇朝明宗西雜記曰 京人十月朔沃酒乃炙醬肉於  
燔中 團坐飲唱 燔之燔燻之 爰事報曰 十月朔有司  
進燔燻 炭 民間皆置酒作燔燻會

○古制 又之今日考 此定祀乃墓而と添すて一凡  
父母先祖の墓と添と添といふ事、女子と定（た）と  
右と左の、女と男と、男と女と、地と土と、一添と添  
二添と添、一添と添、二添と添、三添と添、四添と添、  
合掌と天竺花 終るりるはともろく、の祀といひ  
おむとの牙 神のぬれぶむと、の燔燻と、伏祭乃事  
なせて合掌といふ事

撰子史記曰 孫墳幻 十月一日 解之 感有也 食別  
又從 事 神 之 飲 食 別 稱 亦 有 也 張 子 曰 食 与 十 月  
朔 日 展 墓 志 可 為 神 亦 初 死 當 終 事 也 曰 釋 記 云  
十月一日 墓祭 夢 冢 報 曰 十月朔 都城 士 庶 皆 有 城  
餐 墳 墓 中 車 馬 朝 浸 如 食 節 之 有 與 志 十 月 一 日  
國中 國 俗 皆 化 糴 糴 或 化 京 師 以 祀 先 祖 蓋 告 冬 之 義

初代美日鏡と新して念事ありけりやけり也上代美  
乃日肉飛寮より出言花とまふ家ありけり也

こしゆひの言花を美子餅乃名あり

大臣山豆六角豆胡麻粟榎糖あり

乃り此物事と下よりけり日民取より

新してくぬい事乃り此より

延喜式よの言れは花より

元年汝法ありく大印記取を師当り

此の世も本朝の世なりと

よりけりやくれふりおと

侍り初代丹代のすく

とせれ月乃は事たりと

十月の美月よりして美乃用

月れ教うと

侍り

一と

より

と

と

棟梁歳時訓卷六

〇六





八月梨採と取て皮ごと酢水につくぬきこき果を糸と  
 して日干し晒し皮をとりぬきこき果を糸と包て  
 焚きしじ又梨とと收まきし梨子と收めは梨子と  
 穀糠をこき梨子一顆よきとてこき包て  
 酒をこきおとすきい久よ塩を同きよ煮つらひし  
 日今度煮よ日干しとり又塩をこき大梨とをこき  
 煮よこきよの煮に挿し紙よ包て煮あつたよ煮  
 ん煮深くよ煮あつたよ換せし換と煮しす柑梅を  
 又びこくすしし居よ煮あつたよ煮しす梨子  
 と煮あつたぬれハ久しして換せし又柑梅煮あつたよ  
 梨子と收まきしよ煮あつたよ梨子の割合よりや  
 うにこれハ年と経く換せしハ久しし  
 八月乃末蘿蔔の中実一たつと煮よすし十一月  
 よこれハ中実して何し

○蘿蔔醃の法

蘿蔔 千本 細糶 一石 麴 三斗 塩 二斗  
 先方根と取り日日より後細糶と塩麴とつりし

合せ桶乃底よ煮よ蘿蔔とあつたよ煮よ又糶塩麴  
 とつり何つんよ煮よ煮よしは久しし煮よ  
 ○又法 大方の蘿蔔千本よ塩を半入せしとけきて  
 煮れん時用の気より塩多きれんあり又ぬき包じ

たくとへへうん

○又法 青蒿とよく洗ひつらちちり 每枚席と地ひ  
茶少少あつとちく後まつとあつひ水守たに濁し清く  
青蒿一つんがく塩と青蒿かきゆかきまうし  
鹽とつらめは紙に漬ゆとりけまへー又た紙と  
はまきと後よゆ乃糖よ米糍垢とつらませたのた根と  
あひく洗ひ乾方時清く丸し

此月又竈を修繕す

げ月梅子の熟熟せりと取口入鴨一草とー又あ  
漆とす但葉ふののつと用ゆあふ山施まと云

又月金唐葉よとく十月は梅子の熟まるとあひ物

乾し丹毒二月は秋とうぬまのりて灰土とく  
ひい茹とうゆとくー次氏年梅ー裁まひ定ま  
りてまを結まどく五月はさ一本りてく

元結畫傍よとく十月葉葉のまのた枝を一尺とく

又さう日所まよた枝をやくしつゆよ多くうつ  
至正月よとりて根まきりくと水通林下つきの地  
ひくもりつらうゆまの活せまらうまをー高平所  
花とさうく入てま後くまあよひ月所てまゆ  
あにらつた玉をうし丸本葉葉を紅にしてまあまを

は月の中より桐樹の紅葉多しう代置りし可多  
年のより取よりして遷移の氣候とくまれ  
十一月上旬より空よりあり元紅葉の赤  
花をとりけりうはつ一畝ありの葉を以て  
一畝向の紅葉の多しう一畝を以て今冬  
有し初秋の尾の紅葉を若雪のたより  
至生深しうく是月暖帽と裁くまうられ服  
取や四の暖量の疾る

は月半とくくは六の意の精肉の食すから椒と  
くくは血脈をわゆる進とくくは湯味多しう  
くくは肉とくくは月令廣義より又  
蕪と食すかられ鯨肉と食すの病疾と為す也  
来書山書取書より

十月八日候才一水如氷才二地始凍才三維入大水  
の層太きなり候才四虹不見才五  
氣と勝才六地雪止海閉塞才七大雪降  
立冬至甲午の刻中か氷中才刻十分由雪止  
候及射 月令廣義



和歌集卷之六

十

十一月

善と云々と云中と云と云の十一月は善の仲冬 善月 微躬 律と善海と云の十一月の和ふと善月と云ふ 善と云ふは善と云ふと異せん云々

朔日 周の代天子の月を以て、衆者と、終れ、今日と  
あり、周代の西月元日あり、天子の月を以て衆

と云わたり云々

冬を十一月乃中あり、三と云て、一、二、三、法極の二、一、の

陽氣始く、此の冬日の南より、北より、南より、北より、

冬と云ふ一日は、陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

陽氣始く、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

易曰、雷在地中復。先王以是日閉閣、商旅不行、

方白虎通曰、此日湯氣微弱、王若承天、理地在率、天下

靜、不復以役、投助微氣、氣未氣也、伊川易傳曰、湯始

生、甚微、安於後、長有復之象、曰、至日、閉閣、未子

曰、一陽初復、湯氣甚微、不可勞動

今日復と云、一、二人、奴僕、も、あ、り、之、陽、後、と、云、す

一又先祖考妣乃孟孫もを献し季孫もを久新  
果とまむむ一

○冬を乃日港越改越ハ瘟疫と云く徳澤書行依

石ノ尺ノ一ノ種と漢ニハ本と云く火と云く

松ノ葉ノ冬を乃日云

天時人事日知依冬を湯生喜又春刺綏也漢書

漢書六策勅飛原岸若位腕將針柳玉書

秋放梅雪也殊鄉國吳教聖且愛書中机

○冬を乃日十日房事と云く一と云く

は比ハ人カハ氣とゆくひる免かく一と云く

ひくく亦まを後ハ根幸と云く一素問の冬を

喜死瘰瘵すく冬を乃日後各十日始

十五日 孟子の卒也一日云

崖碑考云孟予周報王二十六年  
月十五日卒即今十月十五日

晦日 沐浴

予ハ國乃農民は月ハ初ハ丑の日四時と云くして

と云く冬その服と云くちと云く男女

と云く事あり氣ハの比より云く

賤乃男儀の如きた田北祐とのひく

と云く事ハの事と云く

如く耕似たると云く

丙辰回祊を祊農民と云ふあるべしこれハ祊農人の力牛  
 前記のハ五日の日にあるまや西と申とお通云々用ひ家  
 なくい月よむと云々とてさうの農事終つる内をわらわ此  
 敗法と云ふと云ふと云ふべし  
杜氏西典云く伊耆之代始有神農氏作  
 天子使之巡地之毛植田之烈也其神曰  
 巨農神神農初為聖在位之類と云く  
 凡ハ各田祊と云ふを言れ通一と云へけいす一と云ふと祊聖と部職  
 ハあるたむとてありたりとていふと云ふた事一と云ふれ  
 なくとていふらわれ始と云ふれさるる民の使あつたりゆま  
 事おれハ天子乃これを勝して日月の系をとり一聖聖の  
 乃言よすとのひて此れ乃なきことゆふはすまハスれ  
ことと云ふは 爲滿ちるへし一其事神ハ國のさるる後  
 ありそのさるるたてしうや作國のさるるかありと云ふやと  
 らんもろころまを十月は田祊と云ふ事なりと云ふ  
 されハ事物此あるまゝと十月農功畢里社造至酒  
 食ハ報回祊因に飲樂也終に神始に周人之勝云  
 これと云ふと云ふハ國乃風俗はおのころ事なり  
 い月寧橋金橋柑柚と雲解一一元橋形乃状やう十  
 月末のい月初よのさるる事と云ふくす一さるる事  
 此先の力ハと云ふと云ふ橋の事と云ふ六分つと移く切地と  
 かけす事よきげなるひしてゆふむらる海を此地と  
 あり竹やぐらと云ふをゆるおまのさるる下と云ふと云ふ棚の

上よ乾ろの松葉を煮くくそよは摘と付合らるやに色  
照るは摺とゆきて大丸くくる一上よを風乾れ葉  
ひちろ一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく  
福ふんくとしこひのむはこれ六月の比まて葉と摘  
よく煮て一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく  
こら何更一は二月まておれの味おれ一六月  
ふるとく味よく一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく  
一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく一は摺の肉を  
とましてつよくやゆり相抽金槌とゆくも地の一相色  
葉と摘一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく一は摺の肉を  
とましてつよくやゆり相抽金槌とゆくも地の一相色  
とましてつよくやゆり相抽金槌とゆくも地の一相色  
とましてつよくやゆり相抽金槌とゆくも地の一相色

又抽解子金槌一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく  
○抽解子金槌 抽の肉を煮くと能くおとしをこく  
ことと去 ひろく口とおれかあーのり うごを産ゆくと使ひきて  
好まろくと能くおとしをこく一は摺の肉を煮くと能くおとしをこく  
粗炙あんと入くこをふませ合せ煮ゆる米乃平飯と柄  
末してこいめくそよひま葉三分一をくひくす合  
てたしー 或は葉を煮くと能くおとしをこく 去は胡椒生薑等と如し おれとそよと抽肉半分

本草綱目

卷之五



入莖葉子くむじ能養一しり肉取がしりり切控えて  
 かあるれり方時よく新くうけり日所く垂れ出  
 能く日又切てまらけうすううま入法く風吹水よ  
 ぼりて垂し一凡抽し一ふ抽此酢を加へり肉又こ  
 えくゆんやもちれくくまう

○金橘一しの法 金橘の大をうと取替油をいり外  
 ていらさよあけに白やのりりて垂れ入口よ  
 射し風ひりきりやうふ收垂へ

○大柑葉の法 く新かをこく油油をくくしりまぬと  
 まり皮もこもこ油うまらくと垂れ入ふたし一射垂へ

○控一しの法 控よあく元とあけくく油や、黄  
 しめりりか一射垂へ

六月 菘葉を多くたくして冬煮乃用よ備之し菘と  
 一二寸のこして新れ方と切きて菘よ八屋布に紙蓋  
 式菘よ不ら、ちあうらゆらうつくる菘葉かからぬやう  
 とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 と切へくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 又六月菘と蔓葉の根と多く切て射し一射一いつ  
 ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ののまらつつけま二育の法りりかして垂れ取めると



十一月の六候才一鶴見石鳴才二虎如交才三藪  
挺出右大雷六二候才牙田極剛結才五葉  
角解才六氷凍才七冬玉の三候なり

冬玉至二十七朔二年分夜中千二朔二年分大雷に  
芒種五朔 月令度表

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

日年采納記卷之七

十二月

歳と小定と云々と大定と云々の十二月の采名 孝老 陰曆  
敬服 徳と大定と云々の十二月乃れ采名と云ふは、  
ひん佛名と云ふは、あるは、終ると云ふは、世を極むと云ふは、  
心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、  
心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、心と云ふは、  
附考此記を之に

新日 殷乃代才建丑九月と采名、セー、ウ、イ、今、白、  
殷の正月元日あり 四候これ日とし子親日と云ふは、  
乃がらして候と察 終才事、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、  
ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、  
ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、  
ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、ウ、イ、

八日のちこゝろして臘ハこと今日電とあく目淨となり  
一一集時記よ十二月八日結以脈通る電神とあり集  
善又電とすつるをもろく一乃風俗なり

按と尚二風俗通し類類氏子なり祭と云ふがこら  
祝歌なり祀ていく電神となりなり云れば云ふ所  
こ一以て祝歌と電神とすはあく一又唐事年記又  
毎は亥神無津姫神は二神と今乃一六もろ電  
神となりありとあましてこれもれら我國の電神と

○今日水といはる臺とに入野並一救人方は  
臘中時水未辛治一切疾病製飲食臘八日水

危神なりとあり

十五日秋也佛涅槃日なり破邪滯と周穆王五十一  
年二月十五日佛涅槃すとあり周代の八十月と以  
集方とすあまし二月八日今代十二月なり志るは今世三月  
十五日としつて佛滅日とす俗とありなり

○上旬中旬乃中臘月乃帝と令多く未と春相  
際二一とく正月乃用といふ一もろく一は冬春未  
こく臘日に未と春と令多く未と春相なりなり

范正能回樂府序日余居石湖後東回東得樂善考  
十変採書決考賦二詩以賦風土其一冬春八臘日

傳時冬二年守己六二二

春米為一案計多聚梓白麻中畢事此言春米之

瓦倉中經年不壞名冬春米出子事 又熟聚

○十五日此後屋中乃煤塵と掃く一煤塵と掃く  
世人多く白と乞て恒例恒例すは生とて或風名此後何  
五六朝りに物とす五六日乃後風名を脱日と用

関書と漳志を引て臘月廿四日毎忠掃塵也

初日ハ巾箱とてあると乞又初日と掃く

二十日北は後日と云い 加は日と掃く 幽俗は月中旬より迄乞ハ緯綯

みく而ちちい又緯綯と掃く緯綯と乞い為習と云

乞いと云といひてあるくハ初日と乞い掃く

くありありと掃くハありと乞い掃く

却都たよと掃く事あり

○下旬ハ内親戚と送物して菓書と賀す又云ハ

下代下代親実方預物と送物因昔代者も親力に送物

と贈之—或親と贈之因昔代者ハ師傳と云

人親身及友人乃病と療せし醫師とて云

病とありと物とて人—疎遠なりハ云ハ

を給くせんう解くせんうと云ハ決しハ

はく—鄂吾なりハハ鄂吾かれハ伴義

す人傷とあり—因病とめぐし事とて云

とてそりたたくて久りてあれりては

そひちりそあまはれとくはたすまふ

風土化回吳蜀因倭歲晚相與愧憐之愧兼又夜

愧兼待回大功冬已將畢事は未依の款想す果

假拍不滯後山川流者産多多村小大宮の聖巨魁

交魏雙兔卧家人事再麻珠浦光翻心若老愧不

能微勢出春磨官居故人少里巷佳節過七欲舉に

風指暗生人相これとく尺れハ中々毎とそ再著に

物と親戚に盡し運るうううううううううう

又下句の内年とてとて父母兄弟親戚と客守り事

何りこれ一とせ乃りありたりとる事と後とて

孫子膝引案待回友人適中望際雅尚遲人外

亦復出来行那可追阿呆安所之意在天一嘆已

東海水赴海序是時京都酒初熟和合瓶肥

一日款慰此新年悲勿嗟落案別行与新案辭本

如勿回飲還无老与衰其見ふにけむれみ存よ斷然案吹は

又抑抑代辭編よとく准人衆書鼓會趣嗷お新案のりり成

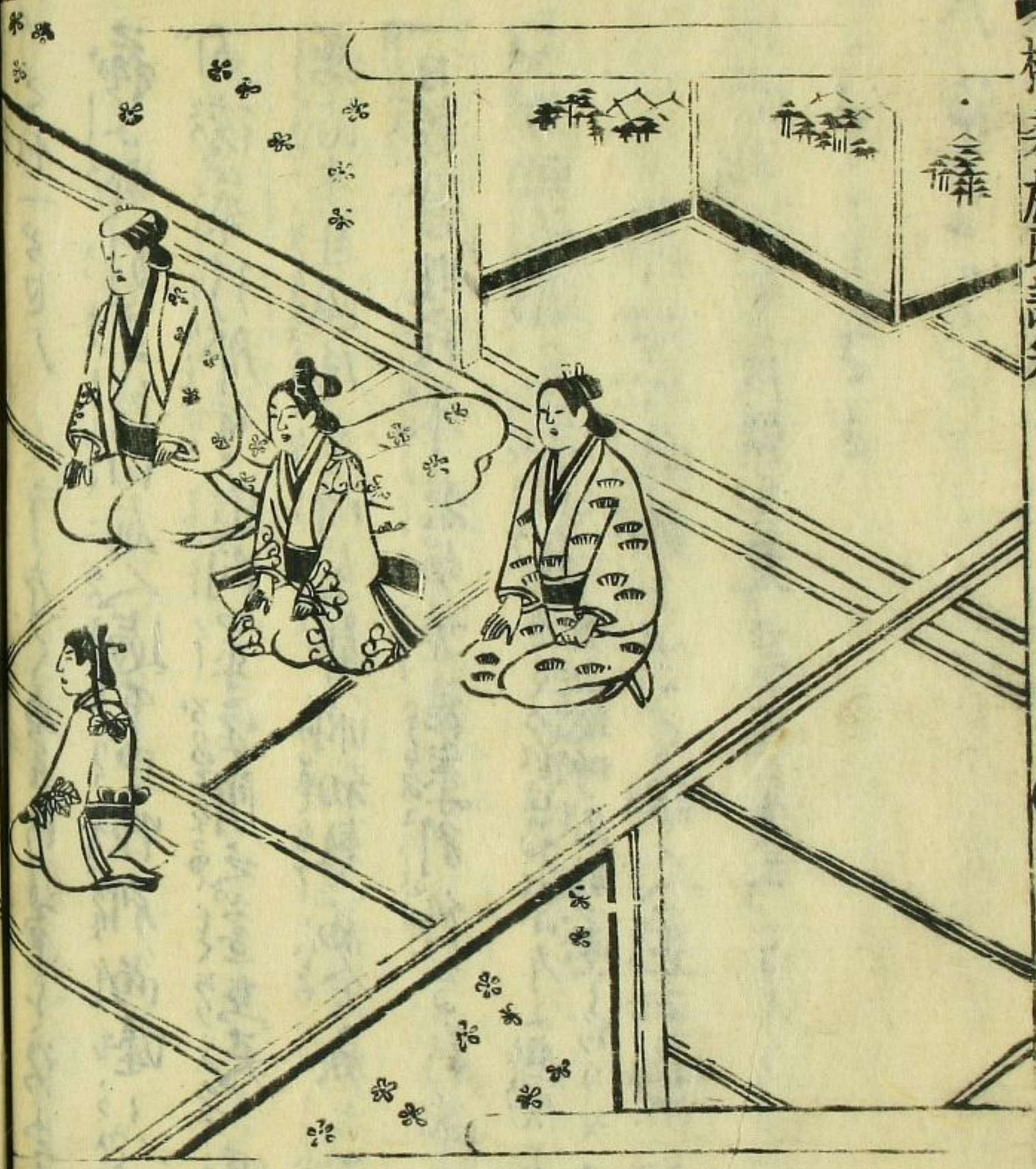
回後都ひさし以爲代後と考刃れハらうと

しとて一とさよ

乃倚るあり



棋多才族原記卷七



棋多才族原記卷七

四

○は月下の年乃日ぬく〜と〜と贈るぬけり  
製と一毛もし〜きひ一年乃百薬よりのちるす沈  
新にわ〜と焼その灰と薬よ〜くよ〜と法よ〜

二十七日は結核と製する〜一日〜ある〜  
よの〜大薬の節の肉よ別に能〜能り今日八年品  
の用りのこと製法〜一脱水〜と能と製する〜ハ味  
美にして久〜培く〜世和方の能あり〜薬初よ  
利りの日教多く歴〜た堅破方り能あり〜製する〜  
後他大薬内よ製〜して〜の製り〜り此は法重  
ハ帯にやり〜りあり〜元能と製する〜よかあり〜と能  
わりの薬よ〜と〜〜又ハ〜薬とあり〜のり〜と〜酒氣  
何重ハ必わ〜た〜ハ初〜と〜酒よ〜れ法に〜  
能れる〜用ひ〜〜〜あり〜と酒氣あり〜と〜  
〜と用れハ能ゆり〜と〜若れハ有〜用  
に〜す必つ〜〜と酒よ〜れ〜と用か〜  
薬酒の〜様米と製〜と〜醫書に〜は  
ま〜か〜〜〜と〜ハ〜り〜  
い〜〜と能〜と〜れり〜あり

二十八日 屠種と合ひ〜

○醫林集要屠種方 大黃 山椒 桔槿 肉桂 防風



各五各 川烏頭 白朮 菝葜 各一各 右八味對之 律囊以

より 漆白に 井中より 掛應に 沈め 元旦より 煎り

囊に 湯を 浸し 煎り 湯を 白く 煎り 飲後

に 囊を 井中より 煎り 湯を 飲す 湯を 煎り 瘰癧と

石病 菝葜を 湯に 煮たり 湯を 煎り 湯を 飲す 赤朮 桂心 各七分

○又方 本草綱目より 湯を 煎り 湯を 飲す 赤朮 桂心 各七分

防風 一兩 菝葜 一各 蜀椒 桔枝 大黃 各五分 烏頭 二分五分

赤小豆 十四粒 三角 乃 律囊 湯を 煎り 湯を 飲す

○又方 赤朮を 湯に 煮たり 湯を 煎り 湯を 飲す 大黃 各五分 川椒 去皮各 白朮

各一分 烏頭 炮去皮 吳茱萸 二分 防風 一兩

○本規 屠蘇方 白朮 桔枝 山椒 防風 各一分 肉桂 五分

大黃 二分五分

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一分

○渡嶂散方 麻黄 山椒 細辛 防風 桔枝 乾薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方 典藥類聚 安信儀方也

○五日 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す 湯を 煎り 湯を 飲す

晦日 又 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す

湯を 湯と 煎り 湯を 飲す 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す

湯を 湯と 煎り 湯を 飲す 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す

湯を 湯と 煎り 湯を 飲す 湯を 湯と 煎り 湯を 飲す

活て喫す一

○屋中一及宅中と表く掃潔し一門柱とたて戸より

泡連繩と也く一  
此薬物作らざるに明ら此一あるに花竹とあるも  
乃ちあらうりる一ゆりてをさるるに事とあらた  
所へ云はれある

○今夜と除夜と一又除夜と一之一年のむりり

五のけし一と心と志つらに種服とと酒會と生紐  
乃垂最よそあつりしと酒會と食しと心一奴奴も

ゆえつとせと事らなりてぬらうりしと事一歌樂一

世しと心と事らなりしと事一歌樂一  
世に云はれある  
附録の儀は紀よりとら  
薄衣を甚き程にせ幼服飲記

臘の數日之分集けよ一年の終るをあらわす

あつと事なり又併也一今夜は人のくあつと

ありと事なり一と事なり一と事なり

と事なり一と事なり一と事なり

○今夜の麻呂儿と夜不電との香と焼く群邪祛

淫宣氣助湯也又外まよ焼と焼一且よの終

所の焼と焼一焼よと廣り多く焼よと中光

以しと湯を熱と熱一又一と文を者ん氣と和

去く下人と一と事なり一と事なり

事たりと事なり一と事なり一と事なり



いづこ鬼は目とらちしや 埃叢抄と志の  
 俗をも不埒の動機多のかるる世に後と  
 るたも此と何をもつんをいれこれ一やぬされ  
 備を度とあらふとまふ 敷のやむたきと  
 胆結れに後終あとの世よりそれより後世に  
 終後志と志のひらひらめ 結文と選乃張  
 衡の東奈賦の伴をり又は東赤丸の敷とま  
 ろくさすくさ 後漢書乃後乃力更なりぬ敷乃  
 中の五季のまは今 胆結と豆つらむのち風  

 かにやういと鬼と意とを教ありは氏物終るちやと俗の  
 胆とやうと鬼と意とを教ありは氏物終るちやと俗の

たりたりとぬ人のまかこちう角ありて佛書より後世の  
 なるなりと形を物多りとまふりまふたお 作せんとは後れま  
 と能なり 後神の靈とまふりまふり 修那の氣をぬる人  
 をとらるる物多しとされといふとまふりまふり 法陽の二か  
 びとのまふりる 敷のりつらとまふりまふり 法を神なり 法を  
 吾なり 法をまふりいふまふりまふり 法を神なり 法を  
 又 胆結とまふりまふり 鬼をこく 編をうらとまふり  
 たり 披をたぬまふり 人の氣を法をぬるまふり 後と  
 暗申 作ま 終 抛 打 意 依 方 鬼 眼 結 行 此  
 大直と投く鬼は眼とらつらつとまふりまふり 終  
 志のまふりまふりまふりまふり 乃 夜の鬼と  

 鬼とくまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり  
 鬼とくまふりまふりまふりまふりまふりまふりまふり

（今おつら）のから大戦と折らまひる一聞鼻

鬼乃人とくらんことふとあせく樹をたぐし族  
 蒙抄に人えわれこれ又あ他の夜をまは作集  
 ともれしすくしにまた日記よあししりかう  
 われの上の法をいししあはくはくしし後  
 くの書に樹符畫終畫終帳戸をくゆきれ  
 の鬼とあせくまよのよしえわれその勢きくし  
 〇屠獲と今日より井の中に海へまゝし毒のあはきり  
 傳言前り海にのりよ

一杯茶酒を留跡坐看新年上盤筍只思梅花  
 明日を花餅お餅ふ知を

又冬過りゆめ

旅飯を飛鶴を眠客ん何事持渡死友卿今言  
 思千里秋葉明報又一年

又方秋雁り

更与梅乾把一杯。酔色帽字等春春須更使是  
 の年事。留のき吾一併開

又王裡り

今家と能あ明年の日供。是は一杯去春也五  
 更亦氣色六中。汝執帳意借。風光人不景已  
 王後園梅

古今集よ喜遊別樹

こゝろをいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
後指をまふふらふ系奉儀

いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ

いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ

いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
いふもたれはらふあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ

○はれ獲り形と圖とく枕と地えはらふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
て今の世傳よとらふるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
執りたるはこれと周りととらふるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ

梅とゆゑ獲る爾雅よせたり流洞及竹とくくふ  
唐代はるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
犀目半角虎足之皮海圖其形遊郭今  
候候之白澤又流洞とくく皮為生邊外福別洞  
勝外之氣これとらふるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
西く梅をたふしんかたのこゝろとらふるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ  
食とくしほの海をたふしんかたのこゝろとらふるあふいふことごとくしほの海をたふしんかたのこゝろ

書いた儘の時依まらうと邪念を起さうと依り  
山崎於中 されども釋代事あるは後ハ賤中乃  
去らせり 別起して取捨のものありけりこれと合ふこと  
 こつり方代事子う存り元世作代人書ハ盡念  
 と誓せし一代共山水平結不結して其心  
 うねりたてをくしく在る者なり水山  
 乃事尚且いふ事とて取捨して取捨して  
 突くとせぬとせんとし取捨の誤りありたること  
 せしむる古人の言ふ癡人の言ふまゝと依り  
 して依りたるが如しとせり

乃依りて成るべき事計りて取捨する事あり  
 取捨の誤りたるを考ふる事あり

○又と取捨と書く禱乃下は替りありこれ禱送  
 之代送寫文よありきとととら人を取捨と別  
 けに取捨は世俗の通患を去るにありとて取捨は  
 取捨入んこととていぬがひなきありとせり此書と  
 又まわしきと修んたわりの事ありし海人  
 女子乃たれもれはして丈夫なり人たはさるるの事  
 ○世俗にまゝ世代お取人ありけり此世に  
 におる世に世代お取人ありけり此世に  
 世に取捨とのべとらるる世の事ありとて

改嫁の事多し一節も多し

これに小婦人女子のたゞの事なりて大妻の事  
 一は事なりたる所と凡世俗に危き事男女との年  
 数より多く出定ありしはくはる所なりしむ  
 年ありは年あり方ありは神のつひに  
 おきてる此定とまぬき人事をしむ俗至乃  
 ともぐとれと幸として民乃誠をつむむるを  
 事として行なされしは事一か事入事一と凡  
 日卒の四紀ももたるふむいむしをる此法はか  
 一や他内経より大正元年安んぬる事と  
 大正元年とい七歳より九歳と加え七十一歳より  
 まくとより七歳十歳二十歳三十歳四十  
 二歳五十二歳六十一歳七十九歳と加ふ九  
 老湯代教たり湯極れいふは家なる此法は  
 後より入るより去るれをいふ年数事といふは  
 世といふは年の数を事とせしむるは  
 教といふは又いふは危年の事といふは  
 俗といふは又いふは神の事といふは  
 教といふは又いふは神の事といふは  
 一は事なりたる所と凡世俗に危き事男女との年  
 数より多く出定ありしはくはる所なりしむ  
 年ありは年あり方ありは神のつひに  
 おきてる此定とまぬき人事をしむ俗至乃  
 ともぐとれと幸として民乃誠をつむむるを  
 事として行なされしは事一か事入事一と凡  
 日卒の四紀ももたるふむいむしをる此法はか  
 一や他内経より大正元年安んぬる事と  
 大正元年とい七歳より九歳と加え七十一歳より  
 まくとより七歳十歳二十歳三十歳四十  
 二歳五十二歳六十一歳七十九歳と加ふ九  
 老湯代教たり湯極れいふは家なる此法は  
 後より入るより去るれをいふ年数事といふは  
 世といふは年の数を事とせしむるは  
 教といふは又いふは危年の事といふは  
 俗といふは又いふは神の事といふは  
 教といふは又いふは神の事といふは



或人ひくりに物ゆをせるといふことあり  
 乃蒔田蒔田をいふ天命をまはす何れか  
 とまぬつていふやこれ危年とよふ事  
 万事不終すといふ人々よく言ふことあり  
 まろころまをむ乃後才三の成れ日と臘日と号し  
 ばは律とまつり又古に聖賢民を功あり人とまつり  
 より一漢書の儀の元といふ又聖賢之典より臘ハ生  
 律とまつり蟠を百律とまつり同のいへる事とあり  
 小室大室二中日の月今世信ふ事の中一掃すは

たぐりて換世の此の時をすり掃り又記す

○久薑と製する法 母薑と室代中のあはれ七日

お日又日浸して取わけ皮と去り干貯す

○え茶とくら貯す一を法 此のあはれつりたり

年久しとる薯蕷とあはれ細力して皮と去切(ぶ)

て米粉とあはれいけあまつぬと流乳す鉄とあ

○わ糶米とわ糶米とわ糶米と一日あは浸し

一日の乾すめはとりて七次許久しく浸せハ米乳

ぬをとりあは糶米ハ米して懸餅と糶米ハ餅

ろ糶して病人は用れハ泄瀉ととも勝胃と福

てん脈よりつまひ

○投米と乾飯より法 投米と多く臍疝のやみ日  
 後一盞乾飯にこむ一曝乾志と瓶より入貯重し一用  
 り時熱湯に浸せし速く乾飯をかり粘るすし一用  
 不塞苦茶あり強引乃時布より包てこれと沸湯に  
 投す之ハ急ぐ飯とかり乾飯用送布に浸中至可強引  
 ○糲米代粉と乾飯より法 上の代糲米と煮乃  
 しく臍月の水に浸し毎日多と少二三日色を石  
 臼とよく洗ひて布れ米と磨し多と少とてまめ  
 けしとよく磨し石臼の石臼めく磨して又とす

あま化桶より入ぬと加之一粘重く浸めと去りけし  
 毎日水と換く水乾とるなり三日くらむ後棉布  
 の新袋より大粉と入しして多と去極よたまきし  
 水とよくすす出つて乾し多と乾小入しすす多めれ  
 め去りて又袋より多と多とつよく去りて一多  
 去りて袋よりかきし多とて日よ布より乾し  
 時又このうにこりて乾平より多とるなりよく乾し  
 小入しこりて一用の熱湯に浸し一用の熱湯に  
 かくこめく餅し一熱湯に投して後乾水に浸して  
 食し一用の熱湯に浸し一用の熱湯に浸して

くうにふくくとくしと食の甚美あり性温世病を  
くう脾胃と痛ふ事おけく再煮て用へし世病  
食氣滞ありあま用へし

○赤大豆と多煮くくは赤大豆と煮中よ煮く  
くうくうに食を入くして煮るは法平く一收まへ  
年と行久して中用ても換せす異月一應解の  
色よく用てもとあくは即時一用たされと煮く

○麻豆よく粒と煮く大も切て二三のちくして後水  
よつれ又二三日ゆくと一丸かよよゆくと米粉と煎  
きく又麻豆ん八ま一煮くは即時一用たされと煮く

煮くは肉やよく通るや湯の中へ煮くは丸か一煎  
煮くは次煮くくく煮て煎出く一煮湯に漬くして米  
豆粉と煮く一用の好く片く煮く性温と氣  
と石塞恙久くくくは四月中一八三万の一皮水  
を擲へし二月より毎日煮くとゆへしよよつとる  
米粉と煮くは換へし奥へし

○麻豆よく煮くは赤大豆と煮くは法平く一收まへ  
赤留大豆と煮くは赤大豆と煮くは法平く一收まへ  
物食のた後くは赤留大豆と煮くは法平く一收まへ  
ゆへしよよつとる米粉と煮くは換へし奥へし

八 浅きものにはひらりと煮ゆるひた合を煮てとけい  
 能に急煮してありても何れも火をとたきあてて  
 ぬき白あくよくばくたれはあくと飲より明朝  
 まてにして同一煎りかのもろろを煮ては  
 ぬきこれ一煎と功と多く不煮一と結露一  
 豆汁不濃して性全く味美なり又火と冬  
 くだらよく煮せしめんときれい大豆汁ぬき  
 てうすに作るも煮物味の味前煮るべきとけいよ  
白二両と一両

二三斗粒分、  
煮れに味格也

○ 大豆煮物乃 煮物 大豆を煮たはと去火の後

蒸し煮て上白乃米麴を五斗或数石入塩三年  
 合くよくくうとつこ桶よはれ重三年日えう包て  
 用の味極く甘く色白

○ 五斗煮物と煮するは 大豆一斗麴一斗酒糟一斗

宋糖一斗塩一斗右一のよつこ合するなりぬうのりて  
 一い煮物性軽く腹中につくえ次病人は用て  
 魚肉を煮ると煮るに好まゆ

○ ぬきものと煮るは 米のぬきとあくと飲くこぬ  
 瓶子で能ひして煮てはる何れとたきまては  
 垂聖日あつとく何れかぬう一石塩一斗

并葡萄酒のりごと入白きく結つるものはあつて温氣  
乃強つらとさす桶少くも瓶とて毛洗ひやいと  
よく至来年正月より新し又白く入つては  
器に入まへ

○又法ぬくとあつてかくこひたるおん膏の内に  
油のやよぬしとあ桶とて毛瓶にくも入至十  
又日研とてかくこひの時白く入り白く入つて  
くまると塩とくこ白くはる合せた桶を桶  
て毛瓶にくも器に入つて汁多かり塩いあつてよ  
くまるとくこ入つてたれたれとくこ入つて毛洗ひ  
臭ひの身はあり桶中の氣味はあつて食積りくこ入  
病人に用へ

○厚皂と塩淹るる法 厚皂をれ毛とぬきまて  
腸と去洗ひす毛機をぬくかき腹上塩とて入  
又甲より毛雜竹少く塩と多くこも入又外も塩と  
よく付足とつるまことつるは合せさうまらんけつて  
一板とけり塩ゆきとつるあり毛後紙よつて毛と  
苞よつて毛洗ひさけまへ一法考れん塩淹れはかき  
○塩淹銅の法 海鏡と紙はさうり塩と多くはき  
桶に入らぬのちあらぬれとく一板とさるあつて

合せ一脱くまひりくして鉄やうとくまひり  
 又薦こもの包てきくろもすしけはもとむらうくひり  
 こまの包こもひきくろもすしけはもとむらうくひり  
 上より打ぬして塩代紙のりす時つゝます  
 一し或赤土よ塩代紙すし

○魚を糖漬乃法 魚をよ塩と替へて味も  
 一日一夜至

糖漬乃法云云おやと塩よ法也  
 一し塩よ漬れハ替へし

あはく塩と法去紙といくあ氣とぬく糖よ塩  
 か入すたぐひもんよ塩と用ぬるる乃塩か入れ  
 ぬるる一して塩と替へて魚をよ糖に漬くものら  
 せり一と糖を重く一替へるとかろぬるものぬるものら

方あつた塩を重くするものらとまりてすし  
 せん風引をやく換ひ振替せされい魚をも替へす  
 手箱と二つ兼用てきくろもすしけはもとむらうくひり  
 塩をよ塩と替へて味も

○糖餅糖餅の法 塩引ともの法 大く初より骨と去酒よ  
 浸さぬるものらとくろもすしけはもとむらうくひり  
 ぬるる一して塩と替へて味も  
 ぬるる一して塩と替へて味も  
 ぬるる一して塩と替へて味も  
 ○糖大根糖大根との法 ぬるる一して塩と替へて味も

根の毒を去り小繩乃海乃穴をわけ小繩を焚く  
風を去る毒を去る日粉粉のうけまて大毒の  
終るまで九三日をまよさす  
海は何してぬお共何よりけくまてとくは  
あつ拍ちかひつて風を去る佳  
○胡蒜苗のつけ物と製法は一に胡蒜苗の

大毒の毒を去る能は二三日をまよさす  
つぎに能は志をいふ海をそれ改清てす初より  
そそいつこれの味をすて随く久くまよさす  
どい

人の生薬より薬中の毒を去る人阿りてると  
根すれり口舌とだらう海やう根すれり中を去る投片  
は切りて縁月れあはけりえうつけきよめてて燗  
湯と敷交泡とれれ毒を去るあはれりてして推さ  
う世次毒星の又あはれ九日まよと泡とらへる藥湯  
乃能てあてきよまよひえて後を何なり又熱湯  
へへめむせされの毒をすす

薬中の毒水と解薬の一を大敷乃糖菓瓶月とと  
投薬を入る年をり毒の根にうらまひてを  
あひ風を去る不後やうにす九日毒水の知識をす

能一切の瘡瘻及瘡癰癰疽之類瘡毒疥癩時疫と  
 治し目疾といふこれといひ油と他方硫と他れ入味  
 甘美にして久は堪えと云て銀肉と浸せたる月毛扱  
 せ火に入敷百果菜蔬乃種子と浸せたる火多くして  
 炭と生ぜず烏口のくすも煮て六畜の瘡瘻後病  
 と治じと月令廣義より云えり又とく臘雪水すくと  
 含煎とのりけ煮くも地神油を火煮てとすれハ不器  
 臘及よ志あるに方香油と禁よ磁すもハ沈器不入膏  
 華に用く非効あり婦人の形はぬれハ瘡多し光りて  
 凡生をせり多之類の瘡癰の用と云一飲食業者  
 これと用く功他油上倍は又臘月の乾脂も亦  
 貯て膏薬等の合す一と月令廣義より云へり  
 凡刃劔埃散等ととる十月より正月までの間に  
 一とこれ様よく多く補生をのれり中とりのく則す  
 柳の枝と切てとすまれば地神油に代りて根と生ませ  
 ば月忌を煮ると細くしてこれと夏月を煮るとく瘡  
 てへのめハ瘡癰と瘡す  
 冬月甚きにして瘡之の老らるる多くん身冷て瘡死  
 或冬月あるに身冷て瘡死とりの多り何れに肢すくハ瘡大  
 微氣ありハ先を煮て冷乾して成さる事ハ此を以て瘡

此の類は瘡癰癰疽の類瘡毒疥癩時疫と  
 治し目疾といふこれといひ油と他方硫と他れ入味  
 甘美にして久は堪えと云て銀肉と浸せたる月毛扱  
 せ火に入敷百果菜蔬乃種子と浸せたる火多くして  
 炭と生ぜず烏口のくすも煮て六畜の瘡瘻後病  
 と治じと月令廣義より云えり又とく臘雪水すくと  
 含煎とのりけ煮くも地神油を火煮てとすれハ不器  
 臘及よ志あるに方香油と禁よ磁すもハ沈器不入膏  
 華に用く非効あり婦人の形はぬれハ瘡多し光りて  
 凡生をせり多之類の瘡癰の用と云一飲食業者  
 これと用く功他油上倍は又臘月の乾脂も亦  
 貯て膏薬等の合す一と月令廣義より云へり  
 凡刃劔埃散等ととる十月より正月までの間に  
 一とこれ様よく多く補生をのれり中とりのく則す  
 柳の枝と切てとすまれば地神油に代りて根と生ませ  
 ば月忌を煮ると細くしてこれと夏月を煮るとく瘡  
 てへのめハ瘡癰と瘡す  
 冬月甚きにして瘡之の老らるる多くん身冷て瘡死  
 或冬月あるに身冷て瘡死とりの多り何れに肢すくハ瘡大  
 微氣ありハ先を煮て冷乾して成さる事ハ此を以て瘡



たり衣とこしくこれとつこりて米と飯費して袋  
 に入んとと髪すこく米ひゆき又他の袋に飯費し  
 たり米とへく髪すこく或火とたきり竈の下に炭灰  
 と用りこりこりこりして男渡りより日用氣同く  
 法去薑湯温酒粥をくとあへて保赤すこく一先こく上  
 と温すこく火とこくわづの冷血と火乳とまぐく  
 ぬるす又雄黄煇硝を等分と用て末に赤眼症に懸ては  
 續地物急いといく十一月甲子の日に食らひの  
 難るる一月令度義いにく積肉積肉生敷と食らひと  
 忌むる火燭の果葉と食らひかられ世と多食か使凡

物代筋骨と食事をかりれ米食書にいとく髪と食  
 こりかきこくと害す牛肉と食らうなられ神とわ  
 ちの髪と食らうこりこり神氣と持す汗蝦乃割と食  
 事かたれきこり八股よいとくは月のく草既と食ら  
 一他月これと食らひ病とぬるす

損軒乃後く新書の中はこり月の食物禁こり後  
 その多う一毎月某物と食らひ某病とまひ  
 こり於法湯家の物と夜かこり一洋よを強か  
 記すこりこりこりこりこり古れ方書にこりこり  
 こりお伝家本草にこりこり載らる雨のれ多り

修すべし決しり多れども今は書りし難き此状  
其をその中へ載て人の被聞ふ位をうれ可きハ  
乃心人此擇之これと多程とるよまのこ

十二月乃去候牙一馬小郷牙二鶴如巢牙三難如難太  
少多此之候あり申は難如乳牙五疔多屬疾牙六  
水澤腹壁太大多た此之候あり  
大一年十二月よりして  
七年之候あり二年二條の  
まの月令及昌氏書秋  
惟菊子よりとる

十二月屋敷の刻敷少多六日山奥及蹴大受ハ与大  
異反蹴之 月令度書

日本書紀卷之七尾

四 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御所會 ○二日 車馬本形寺松籠子 ○四日  
花鳥井敷池鞠指 ○七日 禁中御所會 鳥籠 笠面山赤  
才天手 草橋川祓子 ○八月 十日乃と後七日御修治  
○十日 西之文夷系 ○十三日 南都心經會 ○十四日 十七  
日と何勢山田所子此祓子 ○十八日 其後爆竹 差源祓  
如了等能 河内國平の志津粥 後本國坊取松籠子 ○十六日  
林多津所長會 祓林寺大被差 源源岡庵堂念仏  
○十七日 伶人舞并舞危丁 ○十八日 林多津爆竹 ○十九日

八幡夜祭云 廿五日と云は此云○廿二日 本山寺の寺  
務也云能 ○初宣 轉る云

二月

朔日 七日と云有教西多也 同午中と云二月堂新 ○四日  
初年云 ○七日 十日と云有教新の能 ○九日 十日と  
少許新也 連き云有教新 ○十日 本山麻葉寺云 ○十一日  
涅槃會 涅槃大徳社 本山酒造云 ○十六日 換塔  
○廿日 演習云 ○廿一日 天宮寺 伶人孫 ○廿五日 送前  
寺云 少許天祿寺云 ○廿五日 本山寺 府天祿寺 ○  
初卯 大雲寺云 ○初午 橋前 止心寺 本橋寺 鐵  
法云 和泉國水乃与初午云 ○上申 春日云 ○修善寺

三月

三日 替年 關籠 飯若の午 石山云 西津云 土浦  
の午 辰名 ○又日 一孝寺云 竹葉寺云 ○六日 一孝寺  
法云 今日より廿日と云暖味大念佛 ○八日 泉涌寺 石山  
忌 ○九日 水尾云 泉涌寺 石山忌 辨の初 ○十日 今云  
安樂花 ○十一日 吉祥會式 花見 ○十二日 今日より  
日と云在經孫傳 日若八馬の  
如雲云 今日より十日口と云善遠寺 大師  
忌 本山取親堂  
中云 ○十四日 壬午念佛 本願寺 ○十五日 本願寺  
武別角田川大念佛 山崎火の取 ○十八日 泉涌寺云

二十九日 漢教新也身拔。二十日 東京仁心寺弘法親王  
之御女侍。○中の午午の日二つを併し  
初の午をみる 栴檀の御出。 中  
空佛九用  
字 之流手摘。 石清水佛付也。

四月

朔日 江別院麻堂。二日三日 南都の寺の修。四日  
廣徳堂 龍田堂。八日 灌佛。二日 戒壇堂。在能。○  
九日 清多比土堂。十四日 南都の法事。○十五日 三  
井寺の園子土。十七日 紀州和野の土。 難波臨  
日之土東照土。 尾列の古高松殿土。○廿日 佛  
田見。○廿一日 高松殿土。○上卯 栴檀堂。 在能堂

○乙辰 八幡堂。○上巳 山科堂 江別多雲堂 同堅田堂  
○初申 大原堂 平野堂。○初酉 松尾堂。○初亥 大原堂  
○中子 吉田堂。○中卯 江別八幡堂。○中辰 向日の御堂  
○中巳 久世堂。○中午 笑友堂 江別堂の土。○中  
申 笑友堂 山王日吉堂 山王土堂。○中酉 笑友  
堂 松尾堂 栴檀堂 園白殿堂 高松殿の土。○中  
之天 漢教の土

五月

朔日 笑友堂の土。 栴檀堂の土。○二日 高松殿の土。  
笑友堂の土。 園の御堂。○七日 今交新興の土。○八日

○十三日 懷州宮國郡堂 ○十八日 今之堂 ○廿日  
○廿三日 坂本支社堂 ○廿八日 住吉河田人  
○晦日 祇堂河田堂

六月

朔日 廿一と富吉坊 ○二日 之旗の虫掛 廿日 ○又日  
祇園會河初 ○七日 祇園會 今日より十日と祇堂  
御旗堂 ○十日 祇堂會 尾列津島會 竹生橋會  
御後朝天子堂 ○十八日 尾列津島會 以長今堂 三幸に  
後赤坊西祇堂會 竹生橋會 寺本小倉祇堂會 ○十九日  
今日より明日と伊勢堂會 ○十七日 相國寺織法 志堂  
堂 廣島堂 ○十八日 祇堂河田入 ○十九日 河田河原  
細原 廿日 ○廿日 鶴宮竹切 ○廿日 嶋宮と丸の細原  
○廿二日 大坂左衛門堂 ○廿二日 松尾御前堂 能三友  
明日又友 ○廿四日 老忘干日坊 廿五日 住吉の虫平  
王舌虫拂 大坂天宮坊 楊立堂 ○晦日 雲霞堂 五月  
祇 住吉河田 江別唐橋 日堂 ○五月 中 廿五日 河田  
七月  
朔日 雲霞後日坊 ○六日 少所津子坊 ○七日 少所社  
壇棋掃 車馬古堂 并池坊三祀 苑多軒友朝 坊  
参入 ○八日 文珠會 ○九日 古友坊 ○十日 法米子日坊

○十二日 十日と五日の夜に燃焼鬼 ○十四日 禁市 燃焼 ○十五  
五日 八幡安土の臥 三升と女宿 其樂施儀鬼 今白  
い明日と云ふ處に石動子日事 十七日 白濁と海流一花  
帳 ○十六日 又 事山大の事 松崎の火流の事 西知事成約  
取力火 松崎の自せり 丸の事 松崎の事  
勢別 留と事入 ○十七日 素の事 日事 ○十八日 新  
之 濟出の廿二日 地蔵の事 ○廿九日 徳別 海と事

八月

朔日 禁市 事入 河と事 松尾の事 和泉の事  
村事 ○二日 界と事 ○四日 少許と事 地蔵  
教習 親比文事 ○六日 河川と事 一花 山と事  
沖水八幡事 事入の儀事 松崎の事 松崎の事  
之儀事 七坂 江川と事 度法月事 比戸 深川八幡  
事 七門 老海事 後事 松崎事 ○十八日 新と事 事入  
事 ○廿二日 産と事 子と事 ○廿三日 事入と事 事入  
府と事 ○廿四日 吉田事 ○彼年 事

九月

一日 山と事 本幡事 ○八日 泉海と事 利事 ○九日 編と事  
七布 松崎 磯崎 代と事 事入 七坂 生と事 後  
事 良大明 事 肥と事 七坂 海と事 ○十日 下と事

大津口伝文堂 五條天神堂 山科口の文堂 伏見西寺堂  
 ○十一日 伊勢守幣 出陣 吉田より伊勢洲旅舎 ○十二日  
 左秦堂 ○十三日 白川堂 ○十五日 実念堂 栗田口堂 江津御明  
 部三年より後徳王 河内守堂 寺前小念堂 ○十五日 東  
 山長徳堂 三石堂 ○十七日 持別池田異服漢取堂 ○廿日 下京  
 中女堂 名取堂 竹田堂 建仁寺 大東堂 聖高堂 ○廿日 堀池  
 の匠 ○廿二日 大坂府麻堂 院堂 ○廿二日 左秦堂 ○廿四日 園の桂堂  
 本福堂 浄土堂 麻呂堂 山科寺 聖堂 ○廿五日 天徳流満堂  
 田五堂 ○廿六日 山堂 ○廿七日 持別は村堂 ○廿七日 池堂 大坂橋  
 五郎堂 ○亦巳午 肉防官堂 ○酉月中 甚盛堂 文徳高堂

十月

又日妙心寺遊了忌 十五日と浄土宗法寺十夜 ○六日 南御座  
 寺法心會 ○十日 修別金比良堂 十一日と豊福寺法心會 ○十  
 三日 日蓮宗新仇 ○十三日 浄徳齋王院堂 五王院 杉尾全利  
 昇徳 ○十六日 七福寺了了忌 ○十七日 肉俗永浄徳堂 ○廿日 江  
 戸徳商人夷堂 四條寺町土佐正宗文徳之辨 ○廿五日 出陣 大坂御寺

十一月

八日 女いりり堂 指搦野の事 ○十日 東也堂 ○廿二日 一向宗二五  
 廿四日と五重寺佛名 ○廿四日 大師徳 妙善大師 ○廿五日 廿八日と  
 廿九日御堂 ○晦日 寺堂 ○初申 大文徳院堂 ○初寅 徳徳堂

十二月

十五日ハ懷安居カニガキ○廿二日大徳寺オホトクジ○十九日廿二日  
栴尾シタノの佛名經ハツミナミノキヨミの晦日 祇堂キドウを多タりうけ 志シをちりふたむ神  
乃神ノカミ○常トコ介ケ 必カナラ條ジョウ天テン律リツ至シ 吉田ヨシタ至シ

比ヒ外ソト國クニの火ヒ急イソク土ツチ俗ソクとての多タ信シりへられと云イハふ  
登ト就ジュ唐タウ泥ニ此コノ知チ多タれハ只ただ中ナカ傳デン〜  
阿アらるのミ

北野冬事記後

昔貞享五年戊辰三月上澣 雒陽書肆日新堂壽梓

日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤



民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭靈典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也

本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之責而非吾曹之所宜議然如民生日用雜細更宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡豈艱考索嘗屬家姪好古命編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闕其疑慎言其餘者慙我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎予暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註  
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改  
而正之則幸甚

貞享丁卯勉秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '言' and '然'.*

早稲田大学図書館

011888001648